《極地の子ら》から五篇（旧詩帳のまま）

入沢康夫

イドール　焦慮

なぐさめるでせう
ぼく
いくらかは
できるでせう
聞くこと
泣き声
絶え入るやうな
長い
きつと
投げつけてやります
この銅貨
ぼく
押寄せたとき
砂の嵐
時鐘の綱
ないのです
裏
銅貨

銅貨はいつも表しか出ず
イドールは出発できない
夜々の砂の嵐に
イドールよ
銅貨を
投げうて　投げうて！

ああ
できません
行くこと
命じてます
生存
銅貨の表
毎日

ケルケル　哄笑

サントオル　コップの中で笛を吹き
コップの中でサントオル　笛を吹き
すべての歩みを押しとどめて
夏をつむぎ出す

This is the place called Shibuya.
This is the place called Shibuya.
Ah, we are in Japan yet!

十時の晶質の霧が音も立てずに襲ふ車窓に
淋しいケルケルとその一党
万歳　ケルケル
笑つてゐる！　君だけが

Centaure jouait de l'argent pipeau,

Dans un petit verre à boire de l'eau.
Arrêtant toutes les marches soudain,
Il appelait l'été au ciel serein.

サントオル　コップの中で笛を吹き
ケルケル！　どうしたら死ねるだらう

ザク　涕涙

ザク　わかれて　花々や
石につまづけば
（天は青銅）

ザクに向ひて　くづるるならずや

フェーフ　失敗

三角形の尖頂と海面の目くばせ
巨大な弧線の赤（切れた弓弦）

横倒しになつて一度二度ばたついて
水面にはりつく蝶の上に口を開ける
雲が切れて
群青の傷が
どつと
脱出失敗者フェラ
鷗が喚く

シャク　昏倒

殺到する衰弱は突き放つ
シャクを最前列に車軸にもたれて甲高く笑ふ
永遠の潔白が天の
花の上に倒れまい
あらんかぎりの罪はシャクの魂の強靱さにかかつてゐるが
シャクは昏倒して　果しもない

付記　《極地の子ら》は以上のほか、「トデ・チ　失踪」「ジャンカ　心中」「ドッテ　忘却」「ドン　奉公」「リリ　結婚」等、全十六篇で構成されてゐた。